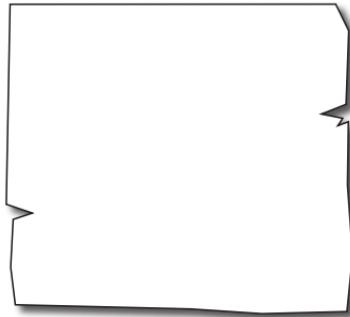


7

THE 7 FRAMES FOR ALL LIFE

7つのワクワク枠 もう1つのエピローグ ～分岐点～



木岬 さんぽ
KIMISAKI SAMPO

地球人類も
いつかここへ——。

妻瑠音、親友心笑君、おじいさん…と生み出し合う
青年期 - 壮年期さんぽのフルーツフル誕生物語

SAMPO FRUITS



7つのワクワク枠

もう1つのエピローグ

’94春（7ヶ月後）

学生当時の、その研究発表の内容は、そのまま論文にまとめられ、マイナーな文献に掲載された。しばし反響があつたらしかつたものの、その後、ほとんど、みんなに忘れ去られてしまつたらしかつた。

’01夏（6年10ヶ月後）

僕と瑠音は、結婚した。

婚約指輪を手渡していたくせに、どうしても口から言えないまま、それぞれ家路についてしまつたのちに、その頃から世の中に普及し始めていた携帯電話のメールで伝えた。

君は、自分以上に大事な宝です。結婚しよう。 さんぽ。

ありがとうございます。よろしくお願ひします。 瑠音。

——ありがたいのは、こっちの方こそだった。

それから、夢見ているみたいに幸せな新婚生活の日々が続いた。

’08春（14年6ヶ月後）

ウェブサイト作りが一段落して、生まれて初めてウェブサイトをアップした。

それから、しばらく経つてからのことだ。

妊娠検査薬の陽性が確認されただけでなく、瑠音のお腹の中で、

小さな心臓の拍動のピコピコが初めて確認されたのは——。

ミラクルだと感じた。

心底ありがたいと感じた。

こうして、僕らは、赤ちゃんを授かったのだ。

このまま、無事育ってくれ！

わが家の新たな宝になってくれ！

そう願い続けた。

’09 冬 (15年4ヶ月後)

その日、仕事を終えて間もなく、瑠音の陣痛の知らせを受けた僕は、職場から病院へと急いで自動車で直行した。

瑠音の出産に立ち会った。

その最中、出産が命懸けであることを肌身で感じ続けた。

どれくらい時間が経ったのだろう。どれくらいハラハラしたのだろう。どれくらい心が揺さぶられたのだろう。

瑠音は、ついに、赤ちゃんを出産した。

母子ともに無事だった。それが何よりだった。

ありがとう。ありがとう。ありがとう。

音楽イン ♪ Birthtime

すやすや眠っている赤ちゃんを、ほつとして心笑みながら見つめている母の安らぎの時間——。

これで、僕は、もういつ死んでもいいや。

ぶっちゃけ、一瞬そう思えていたほどの自分が、そこにいた。

それから、さらに夢見ているみたいに幸せな日々が続いた。

音楽フェード・アウト ♪ Birthtime

’09 初夏 (15年7ヶ月後)

あの岬にて——。瑠音に抱かれている赤ちゃん——。

「おお、おまえさんたちの赤ちゃんかい？」とおじいさん。

「そうだよ」と僕。

「おお、おお、とっても、かわいらしいのお」笑みを浮かべながらのぞき込むおじいさん。「——どっちかっていいたら、母親に似ておるな？」

やさしい笑みを浮かべている瑠音。

「頭の“2つのつむじ”的位置は、父親とそっくりだぜ。アハハッ」

「どれどれ——、——あつ、本当じや。そっくりじや。

アッハッハッ！」とおじいさん。

「アハハハッ」と瑠音。

瑠音は、おじいさんに赤ちゃんを抱っこさせた。

やわらかな笑みを浮かべ続けているおじいさん——。

「わしゃあ、幸せもんじや。すっごい幸せもんじや。ありがとうよ」

“3つ+1つ”的笑顔がそこにあった——。

’09 夏 (15年10ヶ月後)

「ワッ——!!!」瑠音の絶叫が家じゅうに響き渡った。

別の部屋にいた僕は、ドキリ！として、あわてて駆けつけた。

「いったい、どうしたんだい！？」と僕が尋ねた。

「おむつ取り替えようとしていたら、突然おしっこが始まったの。

噴水みたいに——。もう、びっくりしそぎちゃったよ～！」

「——」 . . .

’09 初秋 (16年後)

我が子のお昼寝の前に、『Birthtime』のメロディーを使い、抱っこして子守唄のように歌ってあやしたり、おんぶして小さなキーボードで演奏してあやしたり…試行錯誤を繰り返していた。

’09 初冬 (16年3ヶ月後)

「おお！！」「やったあ！」

我が子が初めて歩いた日——。

’10 春 (16年7ヶ月後)

我が子と一緒に、初めてと公園まで散歩した日——。

毎日、ますます夢見ているように幸せだった。

’11 春 (17年6ヶ月後)

大震災が直撃したのは、第2子の出産が近づいていた頃だった。

岬のおじいさんは、高台に逃げて無事だったけれど、家が地震と津波で全壊してしまい、仮設住宅で暮らし始める事になった。

’11 初夏 (17年8ヶ月後)

再び、瑠音の出産に立ち会った。出産が命懸けであることを、再び実感した。母子ともに無事であったことに、心から感謝した。

こうして、我が家に、新たな宝が増えた。

’11 夏 (17年11ヶ月後)

みんなで帰省した折、仮設住宅のおじいさんの元へ。

ニコニコしながら紡がれた、おじいさん語録——

「おお、こりやまた、かわいらしい子じや。おめでたいやき」

「上の子も、ずいぶん、大きくなったの。ありがたいやき」

「わしゃあ、もう大満足じや。いつ死んでもいい」

「アイアイ愛じやな。ワクワク枠、イキイキ息シリーズの最新版が見つかったわい。アッハッハッ！」

’11 初秋 (18年後)

岬のおじいさんが老衰のために亡くなった。

おじいさんからの手紙には、感謝の気持ちがつまっていた。

若者たちへ

先日は、尋ねてきててくれて、どうもありがとう。

うれしかった。

どんなに苦しいときでも、ありがたさを見つけられる。

じゃから、どんなに苦しいときでも、笑っていられる。

それが人生じや。

幸せに生きるんじやぞ。

これまで、本当に、どうもありがとう。

ありがとう。じゃあに。 岬のおじいさんより。

追伸、ちびちゃんたちにもよろしく。

追追伸、“AINシュタイン”にもよろしく。

’13 初夏～ (19年8ヶ月後～)

『大栗先生の超弦理論』という本に出会って、衝撃を受けた。

この本との出会いをきっかけにして、全く予想外に、物理学の大ブックサーフィンが始まり、物理学にのめり込むことになった。

それは、3ステップス自然哲学——3ステップス自然知愛の適用範囲をさらに深く広げようとする試みにつながっていた。

’14 初秋 (21年後)

それから1年ほどの間、自己流で物理学に取り組んだ結果、光子や重力子の幾何モデルが生まれ、半信半疑だったけれど、ついに、重力が量子化できたかなと思えるような成果にまでたどり着いた。

でも、その成果は、従来の物理学の常識、“エネルギー保存則”と真っ向から対立していた。

教科書に載っているエネルギー保存則が間違えているはずがないし——こっちの重力の量子化が間違えているにちがいないだろう。それにしても、いったい、どこが、どのように間違えているのだろう？

・・・

そのときだ。高校時代の心笑君のレアな笑顔が心に思い浮かんだのは。心笑君——ニュートン君、なつかしいなあ。

彼は、難解な数式がびっしり並ぶ物理学の教科書を読んでいたときもあったっけ——。

チンブンカンブンだった僕が「ずいぶん、すごい本読んでいるね」と思わず口にしたとき、心笑君は、「100%理解できているわけじゃないけど、僕もニュートンやアインシュタインみたいに、早く自然

(nature) のパズルを解いてみたいんだ」と、そっと僕に打ち明けてくれた——。

彼は、授業中に鋭い質問を投げかけていたこともあったっけ——。

「なぜ、 $F = ma$ が成り立つのですか?」と心笑君。

「それこそ、天才ニュートンが発見したことだからです」と先生。

「『プリンキピア』には、 $F = ma$ の式がどこにも載っていません」

「厳密には、18世紀の數学者がこのような数式に表したからです。」

それでも、その数式の起源は、まさに天才ニュートンの発見です」

「天才ニュートンは、どうやって、それを発見したのですか?」

「わかりません。ニュートンに聞いてください。ニュートン君」

どっとクラスメイトたちが笑った——。

ニュートン君——心笑君は、とりわけニュートンのファンであり、熱く語っていたっけ——。

「ニュートンって、すごいんだぜ」

「どんなふうに、ニュートンは、すごいんだい?」

「AINシュタインも成し遂げられなかったような大きな統合を成し遂げながら新しい物理学を体系化し、自然 (nature) との調和性を高めていたという意味で、すごいのさ」

「大きな統合——」

「ニュートンは、例えば、地上の物理学と天上の物理学を統合し、さらに、それまでの物理学の成果、コペルニクス、ケプラー、ガリレオ…の成果を統合したのさ」

「へえー。ニュートンってすごいんだね。てっきり、AINシュタインの方が、ニュートンよりもすごいと思っていたけれど——」

「ううん、比較なんてできないさ。確かに、AINシュタインも、すごいんだよ。それまでの常識を覆しながら、自然 (nature) との調和性をより高めるような発見を成し遂げているからね。

どちらとも、それぞれに、それぞれのすごさを持っているのさ」

「確かに——。——うん。君は、きっと、君にしかできない何かを成し遂げて、21世紀のニュートンになれるよ」

「ありがとう」 そう言って、レアな笑顔を見せてくれた心笑君。

あの心笑君——ニュートン君なら、きっと、何か教えてくれるにちがいない。今ごろ、彼は、いったい、どこで何をしているんだろう?

’15冬 (新春) (21年4ヶ月後)

ニュートン君——心笑君と再会したいという思いが募った僕は、お正月に地元へ帰省した折に、彼の自宅を訪れることにした。

彼は、意外にも、大学院を中退して、帰郷して地元の高校の物理教師になっており、もうすでに10年近く経っていた。

久々に再会した心笑君は、これまた意外にも、名前らしく笑みをたたえ続けていた。もう笑顔がレアではなくなっていたのだ。

ニコニコしながら紡がれた、心笑君語録——

「教師になったのは、確かに最初は生活のためだったけれど、意外に面白いんだ。“先生、どうして $F = ma$ が成り立つんですか?” という質問を生徒から受けた暁には、内心、震えるほど興奮して、しばらく脱線してしまったよ」

「それでも物理学をする夢は、ずっとあきらめていなかつたよ」

「コツコツと自由に学問を続けていたんだ」

「今の自分はボランティア学者みたいなものだね」 …

そんな彼に、彼の書斎で、さっそく、例の成果を見せてみた。

彼は、食い入るように読んだ。何度も読み返していた。

「どうもありがとう——」 心笑君が、しみじみとつぶやいた。かと思うと、「——うん、間違いない。ここから育まれる物理学は、従来の物理学を根底から改善させながら、自然 (nature) との調和性をより高められる可能性がありそうだよ」と続けて言った。

「——え？ でも、エネルギーが保存されていないよ。

従来の物理学の常識と真っ向から対立してしまっている。だから、きっと、どこか根本的に間違えているんだろうね」と僕。

「——間違えているのは、従来の物理学の常識の方、例外のないエネルギー保存則の方さ」 全く意外な答えが返ってきた。

「え？ でも、エネルギー保存則は、常識中の常識だぜ？」

「いくらなんでも、それは、ありえないんでないかい？」

「その気持ち、とっても、よくわかるよ。僕も同じだったから。

でも、よく確かめてみたら、例外のないエネルギー保存則の方が間違えていると納得できるのさ。例外のないエネルギー保存則は、よく確かめられてこなかったウワサにすぎなかつたってことなのさ」

「——たとえ親友の君の言葉でも、さすがに納得できないよ」

「——実証するよ。例えば、ここにりんごがある」 心笑君は、りんごの 1 つを手に持った。「ここでりんごを手放せば、どうなる？」

「落ちるよ」

「落ちて、そのあとどうなる？」

「落ちて、そしたら、大きな音が出て、りんごの一部がへこんで、

その後、りんごが転がるよ」

「そのとき、大きな音が出て、りんごの一部がへこんで、転がる際のエネルギー源は何だい？」

「位置エネルギーだよ。落下すれば、位置エネルギーが運動エネルギーへと転換する。その運動エネルギーが、大きな音を生んだり、りんごの一部をへこませたり、りんごを転がしたりするのさ」

「その通りだね。学校の授業で習った通りだよ。

では、次に、このりんごを、そうっと床に置いたらどうなる？」

「どうなるって——」

「大きな音、りんごのへこみ、りんごの転がりは、どうなる？」

「生じないよ」

「その通り」心笑君は、実際にそうっとりんごを床に置いてみてから口を開いた。「ここで疑問に思わないかい？」

「どんな疑問？」

「大きな音を生じたり、りんごをへこませたり、りんごを転がしたりできたはずのエネルギーは、どこへ行ったのか？ って疑問さ」

「——どこへ行ったんだい？」

「消滅したのさ。そのことが、以上で実証されたことなになる」

「ええ？！ 待った、待った。でも、エネルギー保存則によれば、エネルギーは消滅しないはずだよ。きっと、大気との摩擦熱とかに変化して、エネルギーが逃げたんだよ」

「同じような実験は、空気がほとんどない真空中でもできるよ」

「——」 ・・・

「確かに真空中では音が出ないけれど—— 落ちたりんごは、へこ

んだり転がったりするはずなのに、そうっと下ろせば、りんごは、へこまないし転がらない。大気との摩擦熱や音としてほとんどエネルギーが逃げようがない真空中において、りんごをへこませたり転がしたりできたはずのエネルギーは、いったいどこへ行ったんだい？」

「——」 ・・・ 消滅したとしか考えられない？ 「——ええ？！エネルギーって、実は消滅するの？」

「そうさ。同じような実証実験は、卵や陶器の皿でもできる」
「——確かに」

「しかも、エネルギーが消滅する事実に加えて、自然界で一見エネルギーが保存しているように見えている事実があるから—— 自然界のどこかでエネルギーが生成していなければおかしいってこともわかる。つまり、エネルギー消滅の実証実験から、エネルギーは、どこかで生成しているはずだってことも無理なく予想できるのさ」

「——」 ・・・

「実際、エネルギーの生成の例は、見つけられる。

例えば、従来の量子物理学においてさえも、すでに、短時間であれば仮想粒子が生成＆消滅することを認めている。この仮想粒子が生成＆消滅する過程では、平均エネルギーがプラスマイナス0であり続けているのではなく、その短い時間の間、平均エネルギーがプラスであり続けていて、その間エネルギーは生成しているんだ。

しかも、時空が不連続ならエネルギー保存則が成立しないことを、ネーターの定理が証明している。だから、プランクスケールで時空が不連続である君の成果において、光子や重力子の生成過程がエネ

ルギーの生成過程であっても全く問題がなくなるんだよ。

これらの意味で、エネルギーの生成は、自然 (nature) と調和しているだけでなく従来の物理学とも調和していることになるんだ。

しかも、例えば、電荷エネルギーや磁極エネルギーは、周囲に生成する仮想光子を何度剥ぎ取って光子を生成させても、その都度再生する究極の再生可能エネルギーでもある。この電荷エネルギーや磁極エネルギーからエネルギーを引き出す方が、質量エネルギーからエネルギーを引き出すより、はるかに安全で桁外れに効率がいい。例えば、陽子 1 つ分の質量エネルギーよりも、陽子 1 つ分や電子 1 つ分の電荷エネルギーの方が、 10^{18} 倍以上も大きいから」

「 10^{18} 倍以上——」 チンパンカンパンで意味もよくわからないまま、僕は、その部分を繰り返した。——心笑君には、かなわないや。

「そうさ。この桁外れに効率のいいエネルギー源こそが、あらゆる電磁波のエネルギー源でもあるんだ。太陽から地球へ届く光、電気ストーブから放出される赤外線、携帯電話やスマホから放出される電波も例外じゃない。もちろん、電子等の電荷が振動する際に、熱運動エネルギーとして周囲に散逸する形ではエネルギーが消費される。でも、同じ際に、生成した仮想光子がはぎとられて電磁波が周囲に放出される形だけではエネルギーは全く消費されないんだ。だから、太陽の寿命は従来の質量エネルギーを用いた計算より延びるし、健康被害を含め最近悪者にされることの多い電磁波は、上手に利用できれば、本来、人類の大きな味方になりうるのさ」

そこで、僕は決意を固めた。「——心笑君、ここから先は、ぜひ、心笑君が育ててみてくれるとうれしいんだけど、どうかな？」

「本当にいいのかい？ これを十分に育めれば、物理学を成熟させて、もしかしたら本当に21世紀のニュートンになれるかもしれないんだぜ？ こんなに、やりがいがあってワクワクできる学問分野は、めったにないんだぜ？」

「いいも何も、誰より心笑君こそが最適役だよ。

それに、その方が、きっと全人類のためにもなっているよ。

——それに、恩返しもある。

僕らが結婚できたのは、君のおかげでもあるのだから——。

それに、この試みが成功したら、これがきっかけとなって、君に、いい縁談話が舞い込むかもしれない」

「——フフッ」

「心笑君—— 君こそ、21世紀のニュートンになってほしい。

それこそが、僕や瑠音を含めて、みんなが喜ぶことさ」

「——ありがとう。

実は、恩返しすべきなのは、こっちの方こそなんだよ」

「——え？」 ？？？

彼は、机の引き出しから、ある文献を取り出した。

それは、20年以上前の学生時代に僕が書いていた、あの論文を収録した文献だった。見るからに、ぼろぼろになっていた。

「それは——」

「そう。君の研究論文さ。君の成功が心底うれしくて、すぐ購入して、当時から読んでいたんだよ」

「——」

「結構ぼろぼろになってしまったけれど、ぞんざいにあつかつたり、

保存状態が悪かったりしたせいじゃないんだぜ。何度も何度も読み返したからなんだ。ここ20年くらいの間に、何十回何百回と読みかえしているよ」

「——」言葉にならなかつた。涙が込み上がり、しばし、涙ぐんだ状態のまま涙をこぼすのをこらえた。

「それで、君の論文がヒントになって—— 実は、僕も、すでに新しい物理学を育んでいたんだよ。大学院に進学した頃から——。

この新しい物理学は、大学院を中退して帰郷する心の支えにもなつていた」

「——」 ···

「だから、君の重力の量子化と、僕の重力の量子化が、瓜二つであるのを見て、驚いただけでなく、心底うれしかつた。

それを見て、確信したんだ。間違いないんだなって——。

自分が進んでいる道が間違えていなかつたんだよって、本家本元から、お墨付きをもらえたような気分だよ」

「——」 ···

「君と僕は、別々に同じことを発見したことになるんだよ。

僕は、ずっと孤独に、ひそかに、この新しい物理学を育んできていたから、そのことが、どんなに心強いことか——」

彼は、机の引き出しから、プリントアウトされてクリッピングされていた用紙の束を取り出すと、重力の量子化の成果が載っているページを広げて見せてくれた。

確かに瓜二つだった。それでも、彼の成果の方が、はるかに厳密で、はるかに深みを持っていることは、一目瞭然だった。

ページを閉じた彼は、「まだまだ完全からほど遠くて未完成なのだけれど——」と言いながら、その用紙の束を、僕に手渡してくれた。

僕は、しばらく食い入るように読みながらページをめくり続けた。

心笑君が、はるかに先に、はるかに広く進んでいることは明らかだった。彼は、3ステップス自然哲学——3ステップス自然知愛の適用範囲を、物理学のほぼ全分野にまで広げていた。

「時間は無限じゃないから、どこかで切り上げなければならないんだけどね」 心笑君は、静かに、そう言った。

心笑君は、素スピノル物理学としての体系化をすでに見事に成し遂げ、新しい物理学を誕生させていたように思われた。

それは、まさに、心笑君の健やかな自己実現——自己フルーツ化、そして、彼ららしいフルーツの現出だった。

その成果には、さまざまな統合も含まれていた。

重力と電磁気力の統合

重力子と光子の統合

質量エネルギーと、電荷エネルギー&磁極エネルギーの統合

原始的な力、弱い力、強い力、中間子力のフラクタルな統合

素粒子物理学の標準模型における“3つ世代”的フラクタルな統合

静止質量エネルギーと運動エネルギー（ \ominus 熱運動エネルギー）の統合

ブラックホールの特異点とファイヤーボール（ビッグバン）の統合

新しいブラックホールの生成と新しい宇宙の生成の統合

...

それらの成果を読み取った僕は興奮しながら口を開いた。「すごいよ！！ アインシュタインもできなかつた統合を成し遂げているよ！！ 自然との調和性が高まっているよ！！

間違いないよ！！ 君は、まさに21世紀のニュートンだよ！！

早く公表しようよ！！」

「——ありがとう。

でも、まだ自信ないんだ。まだまだ完全から、ほど遠いから——。それに、まだまだ改善の余地があるはずだけでなく、大きく間違えているところもあるかもしれない——。

本物のニュートンも、自身の研究成果の発表をためらっていたらしいけれど、その気持ち、今、とてもよくわかる気がするんだ」「——不安なんだね？」似た気持ちを自分も経験していたような気がしていた。

「ああ、不安さ。それに、間違えているかもしれない不安だけでなく、博士号を持っていない不安、きちんとした研究ポストにも就いていない不安もある」

「博士号や研究ポストも、ときに確かに大事だよ。でも、君もよく知っているように—— ニュートンは、ペストで学校が閉鎖されて帰郷した奇蹟の2年の中に大きな成果を生んだとき、博士号も研究ポストも持っていないかった。AINシュタインは、奇蹟の年に発表した3つの主要な論文を特許局に勤めながら書いていたとき、博士号も研究ポストも持っていないかった。ついでに僕も、大学生のときの成果を生んだとき、博士号も研究ポストも持っていないかった。

博士号も研究ポストもないからこそ、かえって生み出しやすい成果も、きっと、あるはずなんだよ。大学から離れ、身分のしがらみから解放された自由空間の方が、かえって生み出しやすい成果も。

それに、博士号 Ph.D、ドクター・オブ・フィロソフィー (Doctor of Philosophy) の肩書きも、ときに大事だけれど、その一方で、ニュートンやAINシュタインのように、フィロソフィーの実践者、最初の一歩から自分の頭で考え直す知愛の実践者——フィロソファー (Philosopher) であることも、ときに大事なのさ。

心笑君も、そう思うだろ？」

「——ありがとう。確かに、僕もそう思うよ。

——それで、提案なんだけれど、一緒に連名で公表しないかい？

重力の量子化の説明は、ふたりともが別々の発見者だったのだし、そもそも、君の成果である3ステップス自然知愛が大いに役立っていたのだから」

「——うれしいよ。ありがとう。

でも、それは、おこがましいよ。こっちは、ちょっとした思いつきを、片手間に、ちょこちょこと細々と試してみただけの話さ。

本物のニュートンのように、統合を果たしながら新しい物理学を体系化し、自然との調和性を高めているのは、まさに、心笑君、君なんだよ。3ステップス自然知愛については、それが役立っていたことを、さらっと触ってくれるだけで、こっちは十分満足だよ。

この各種の統合を含む物理学の新しい体系化、自然との調和性の向上は、まぎれもなく君が誕生させた成果であり、すべて君の業績であるべきなんだよ。

その方が、21世紀のニュートンとして、誰もが納得できることだよ。それに、その方が様になっていてカッコいいよ。

よっ！ 21世紀のニュートン！ 人類の宝だよ！」

名前らしく笑みたたえていた心笑君が、さらに笑顔になった。

’16 初夏 (22年9ヶ月後)

それから1年半近く経った頃、心笑君の新しい物理学の体系は、さらに磨き上げられて、ついに公表されるに至った。

“時間が無限でないから”という条件の中の妥協の産物の一面もあつたとのことだったけれど、心笑君らしい見事なフルーツだった。

さまざまな新しい統合が示されていたのみならず、健やかな全人類レベルのライフの誕生のためにもなるだろう、画期的な応用にたどり着くためのヒントも示されていた。

心笑君は、かつて人類が2000年間地球中心の思い込みにとらわれていたように、これまで人類が300年間エネルギーの永久不滅の思い込みにとらわれていたことを指摘した。

心笑君は、“エネルギー保存則が成り立つからエネルギーは消滅も生成もしない”とは決して言えないことを指摘した。

心笑君は、エネルギーの消滅を、“ニュートンのりんご”ならぬ“ココエのりんご”と象徴的に呼んでもいいような、簡単な実験で実証できることを指摘した。

心笑君は、電荷エネルギーや磁極エネルギーが究極の再生可能エネルギーであること、それらが例えれば太陽光のエネルギー源であることも示した。

心笑君は、陽子や中性子といった核子1つの質量エネルギーよりも桁外れに大きい、電子1つの電荷エネルギーや磁極エネルギーから、はるかに安全に桁外れに効率よくエネルギーを引き出せる可能性を示した。

心笑君は、この新しい物理学によって、さまざまな問題を根本的に解消できる可能性があることを指摘した。

...

これらの新しい物理学の成果は、自然科学に革命をもたらすだけでなく、健やかな全人類レベルのライフの誕生のためにも、健やかに天体生態系社会レベルのライフの一員になるためにも役立ち、多くの人々を喜ばせられるはずだと僕らは確信し始めていた。

心笑君は、「これらの成果の一部は、もしかしたら本当にいて何万年何億年も存続しているかもしれない宇宙人にとっては、すでに常識的な内容であるかもよ」とも冗談半分で言っていた。

心笑君は、きっと、多くの人々に祝福されながら、もっともっと幸せになれるだろう。僕は、そう確信し始めていた。

’17 初秋 (24年後)

そして、それは、現実になった。

心笑君の研究成果が、評価され、絶賛され、社会的に認知されて、しばらく経ったのち—— なんと、心笑君は、高校のかつての教え子と結婚することになったのだ。

「ええ！？」

「驚きだろ！？ 僕も信じられないよ。

愛理は、決して目立つ生徒ではなかったけれど—— 当時珍しい物理部の女子の一人でもあったから、なんとなく印象に残っていて——。

それが、近年ばったり再会して—— 意気投合して—— 応援してくれるようにもなっていて——」

「おめでとう。おめでとう。まったく、おめでたいやきだよ」

「ありがとう。ありがとう。まったく、ありがたいやきだよ。

君の成果のおかげでもあるから。君の成果がきっかけで生み出された成果のおかげで、愛理と再会できたり、意気投合できたりしたところもあるから」

「いえ、いえ、どういたしましてだよ。

むしろ、こっちこそ、ありがたいやきだよ。こんなに、うれしい気持ちになれることなんて、めったにないことだし。君の新たな出会いに少しでも貢献できたなんて、光栄だよ」

「ありがとう。——僕には、実は、ほかにも、感謝しても感謝しきれない恩があるんだよ」

「何の話？」

「実は、まだ、話したことなかったけれど—— 僕は、結構、重い病をかかえていたんだよ。だから、僕は、もともと、こんなに長生きできるはずではなかったんだよ。高校を卒業できたことも、大学を卒業できたことも、奇蹟だって主治医の先生に言われていたくらい。だから、自身の恋愛なんて、雲の上また上のことだったし」

「——」 ···

「ごめんよ。あまり、余計な心配をかけたくなかったから、ずっと内緒にしていたなんだけれど—— せっかくお医者さんになった君に相談できなかつたことも、どうかゆるしてほしい。今の医療の限界を、何十年もの間、身にしみて知っていたから——」

「いやいや、そんな、ゆるすも何も、全然——」

「とにかく、それでも、高校時代から、君の存在おかげで、君らの存在のおかげで、僕は前向きに生きることができていて—— おかげで、病のつらさを乗り越えることができていて—— 特に君の学生時代の論文が発表されてからは、新しい物理学に夢中になれて—— 夢見ているように幸せな時間を過ごせて—— おかげで、ますます病のつらさも乗り越えられて—— しまいには、病から、すっかり解放されるようにもなっていたんだ。

この最高級に楽しめるエンターテイメントのおかげで、それこそ寝食も忘れるくらい夢中になっていたら—— 病のことをすっかり忘れてしまっていただけでなく、病がすっかり落ち着いてきて、完全緩解にさえ至っていたんだよ。

完全緩解から、もうかれこれ何年も経っていて、再発の心配もないよってお医者さんからも、お墨付きを、もらっているほどだよ。

だから、感謝しきれないんだ。全く、ありがたいやきだよ」

「そんな——」

「だから、君のおかげで、単に結婚に至れただけでなく、そもそも、こんなに長生きできて、充実した人生を歩めていたんだよ。

本当に、感謝しても感謝しきれない——」

「そつか—— よかつた。よかつた。

うれしいよ。自分のことのようにうれしい。うれし過ぎるよ。

全くおめでたいやきだよ！ おめでたいやき！

それに、ここえみたいやき！ ここえみたいやき！」

「フフ。ありがたいやき！ ありがたいやき！

——そういえば、感謝のしるしと言っちゃ何だけれど、僕の物理学の成果——成果親友へバージョンというのを作ってみたんだけれど、受けとってくれないかい？ 純粹に極上エンターテイメントの1つとして体感してもらえたうれしいんだ。この楽しさや感動が少しでも広まってくれれば、すごく、うれしいんだ」 そう言って、心笑君は、プリントアウト冊子を僕に差し出した。

「あ、ありがとう」 受けとった。

「この中の数学は、ほとんど中学や高校の数学レベルだから、きっと十分に理解できるはずだよ。——って言つたりしたら失礼かな」

「ううん。全然そんなことないよ。助かるよ。楽しみだなあ。

ありがたいやき！ ありがたいやき！

よし、じゃあ、僕も、少しでも広まるために、一肌脱がせていた
だくぜーい♪」

「ありがたいやき！ ありがたいやき！」

’17 秋 (24 年 1 ヶ月後)

とある休日——。

「みんな、今から、父さん、実験を始めるよ」 瑠音と、ちびっこたちを前に、僕は言った。「ここに、1 つの卵があります。これを約 70 センチメートルの高さから、静かに、そつとフライパンの上に置けば、何が起こるでしょう？」

「何も起きるわけないじゃん」「何も起きないよ」

「本当に？」

「本当さ」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみよう」

卵を約 70 センチメートルの高さから、静かに、そつとフライパンの上に置いた。

「ほら、何も起きないじゃん」「やっぱりだ！」

「お、正解だ。その通りだったね。うん。それでは、次の実験に移るよ。もし、この卵を、フライパンの上、約 70 センチメートルの高さで手を離せば、何が起こるでしょう？」

「ええ！ 卵が割れちゃうよ」

「割れでどうなる？」

「卵の殻が割れて、中身が広がってしまう」「ベチャーとなる」

「本当に？」

「本当に」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみよう」

「あなた——」 瑠音の一声。

「大丈夫。僕が、責任を持つから。——では、いくぞ。やるよ。」

えいや！」 パッ、 グシャ。 卵の一部がつぶれた。

「あれ、 ゆで卵だったの？」

「残念。 不正解」

「えー！ するいよ」「するーい！」

「するくない、 するくない。 生卵だなんて、 一言も言ってないよ。

つまり、 こんなふうに実際に実験してみなきやわからないことがある

るってことさ。 それに、 ゆで卵であるおかげで、 いいことがある

「どんないいことがあるの？」

「ゆで卵であるおかげで、 僕が気持ちよく食べられるってこと——」

——パラ、 パラ、 パラ… モグモグモグ…。

「もし、 生卵で、 やってみたければ、 やってみてもいいよ」

「あなた——」

「あ、もちろん、 責任は、 きちんと自分で取るんだよ。

無駄な食品ロスは、 父さん、 ゆるさないよ。 命をいただいているのだからね。

——これで、 父さんの実験は、 終わりだよ。

あっと、 ここで、 みんなに問題だ。

卵から手を離したら、 卵は割れるのに、 卵をそうっと置いたときに、 何も起きなかつたのは、 なぜでしょうか？」

「なんで？」「なぜ？」

「さあ、 ゼひ、 自分の頭で、 よく考えてみよう。

自分の体で感じながら——」

’18 春 (24年7ヶ月後)

とある休日——。

「父さん、今から、新しい実験を披露するよ」 瑠音と、ちびっこたちを前にして、僕は言った。「ここに、1つのお皿があります。このプラスチックじゃないお皿、陶器のお皿を1.2メートルほどの高さから、静かに、そつと床の上に置けば、何が起こるでしょう？」
「何も起きるわけないじゃん」「何も起きないよ」

「本当に？」

「本当さ」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみよう」 その皿を1.2メートルほどの高さから、静かに、そつと床の上に置いた。

「ほら、何も起きないじゃん」「やっぱりだ！」

「お、正解だ。その通りだったね。

うん。それでは、次の実験——。床の上、1.2メートルほどの高さで、このお皿から手を離せば、何が起こるでしょう？」

「ええ！ お皿が割れちゃうよ」「大きな音が出る！」

「そのあと、どうなる？」

「皿が割れて、バラバラにくだけて、飛び散ってしまう」

「本当に？」

「本当に」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみようか？」

「あなた——」 瑠音の一声。

「わかっている。父さん、ここで、手を離したりなんかしない。

お皿が使えなくなったら、もったいないからね。

でも、実は、5日ほど前に、母さん、誤って手を滑らせて、お皿を床に落としてしまったことがあるんだ」

「え？」と瑠音。

「——母さん、あのとき、何が起きたか説明してくれないかい？」

「あのとき、確かに、ガチャン！って大きな音をたてながら、お皿が大小さまざま大きさに割れて、飛び散ったわ。2メートル以上遠くに飛び散ったカケラもあったわ。

誰かが踏んづけてケガしないように掃除するのが大変だったから、よく覚えているわ」

「つまり、母さんは、すでに、先取りして実験してくれていたんだ」

「すごーい」「すごいね」

みんなで拍手しよう。パチパチパチ…。——照れている瑠音。

「——これで、父さんと母さんの共同実験は、終わりだよ。

あつと、ここで、みんなに問題だ。

お皿から手を離したら割れたのに、お皿をそうっと置いたときに何も起きなかつたのは、なぜでしょうか？」

「なんで？」「なぜ？」

「——ぜひ、自分の頭で、よく考えてみてほしい。

想像力をふくらませながら——」

・

’18 初冬 (25年3ヶ月後)

とある休日——。

「みんな、今から、父実験をするよ」 瑠音と、ちびっこたちを前に、僕は言った。「ここに 1 つのスーパー ボールがあります。このスーパー ボールを約 2 メートルの高さから、静かに、そつと床の上に置けば、何が起こるでしょう？」

「何も起きるわけないじゃん」「何も起きないよ」

「本当に？」

「本当さ」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやって確かめてみよう」

スーパー ボールを約 2 メートルの高さから、静かに、そつと床の上に置いた。

「ほら、何も起きないじゃん」「やっぱりだ！」

「おお、本当だったね。何も起きなかつたね。うん。それでは、次の実験に移るよ。もし、このスーパー ボールを、床の上、約 2 メートルの高さで手を離せば、何が起こるでしょう？」

「簡単だよ。ポーンってばずむよ」「そうはずむ！」

「本当に？」

「本当に」「本当だよ」

「じゃあ、実際にやってみよう」

手を離すと、スーパー ボールは、ポーンと弾んだ。スーパー ボールが最高点に到達したタイミングで、僕は、それをキャッチした。

「ほら、はずんだ！」「やっぱりだ！」

「お、正解だ。予想通りだったね。」

これで、父実験は、おしまいです。——そこで、問題。

スーパー・ボールを手を離したら、ポンと弾むのに、そうっと置いたときに、何も起きなかつたのは、なぜでしょうか？」
「なぜだろう。考えてみるよ」「ゆっくり考えてみるね」

’19冬(25年5ヶ月後)

とある日の夜、子どもたちが寝静まった後、瑠音とふたりでリビングで会話した。それは、瑠音が投げかけた疑問から始まった。

「ねえ。あの3つの実験は、いったい何を意味していたの？」
「ここから新たな自然(nature)のパズル解きを展開できるということを意味しているのさ。これほどイキイキ、ウキウキ、ワクワクできること、これほど楽しみが膨らむことはない。

古い常識から新しい常識への大転換の象徴でもあり、“ニュートンのりんご”ならぬ“ココエのりんご”とも呼べるよ」

「“ココエのりんご”——」

「心笑君は、りんごを静かに、そうっと下ろせば、りんごに傷がつかず、りんごは転がらないって説明してくれた。

この“ココエのりんご”を含むニュートン体験を通じて、そこから広がる壮大な可能性に、イキイキ、ウキウキ、ワクワクすることは、For All Life路線を貫くためにも役立つと思うよ。

自然(nature)のパズル解きという極上のエンターテイメントの存在に気づけば、ヘトヘト、ピクピク、クヨクヨ…ではなく、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…こそを育みやすくなるはずだから。かつて、ニュートンの著作『プリンキピア』の登場が、まさに、その

自然 (nature) のパズル解きという極上のエンターテイメントの存在に気づくきっかけになって、そのおかげで、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…ではなく、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…を育みやすくなっていたはずであるように——。

しかも、この極上のエンターテイメントをきっかけにして For All Life 路線を貫ければ、ますます、この自然 (nature) のパズル解きを通じた新しい自然科学が十分に発展できるようになる」と僕。「心笑君の成果を通じて自然 (nature) のパズル解きという極上のエンターテイメントの存在に気づければ、ヘトヘト、ビクビク、クヨクヨ…ではなく、イキイキ、ウキウキ、ワクワク…をより育めて、おかげで、For All Life 路線をより貫けるようになるだけでなく、その結果、新しい自然科学も十分に発展しうるのね？」と瑠音。

「その通り。心笑君の成果をきっかけにして、壮大な可能性の広がりにイキイキ、ウキウキ、ワクワクしながら、For All Life 路線をより貫けて、新しい自然科学が十分に発展できれば、人間社会レベルのライフや生態系レベルのライフがより持続しやすくなるし、将来、健やかな全人類レベルのライフが誕生しやすくなるし、将来、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員化を果たしやすくなる」

「そつかあ。よかつた。いいことずくめね」

それから何年も後の初夏（何十年も後）

帰郷の際の散歩がてら、あの地球のかすかな丸みがわかる岬に久々に一人で来ていた。座りながら思った。

僕は、地球人だ——。

いや、それだけではない。僕は、宇宙人でもある——。

「わしゃあ、宇宙人じやからのお」 おじいちゃんは、そうとも話していたっけ——。

…

——ああ、すっかり眠たくなってきたよ。

いったん、お昼寝でもしようか。

横になった。

でっかな青空が広がっている。白い雲が浮かんでいる。

さわやかな潮風が全身をなでている。

それから目を閉じた。

ゆっくり、ゆったり深呼吸しながら——

お心笑しながら—— かつてのおじいちゃんのように——。

まどろみの中で、替え歌を作っちゃったりもしながら——。

作曲 初果ひるね 作詩 おじいちゃんひるねさんば——。

タイトル 『Joy of Life』 ——『生歡喜』？

ドコドコドコトバ♪ ココココココロ♪ イマイマイアタマ♪
ポカポカポカラダ♪ イキイキイキモチ♪
ありがたいやき♪ おめでたいやき♪ ここえみたいやき♪

アイアイアイデア♪ ワクワクワクフウ♪ ニコニコニココエ♪
ポカポカポカラダ♪ イキイキイキモチ♪
ありがたいやき♪ おめでたいやき♪ ここえみたいやき♪

いつも ここから♪ いつか ここへ♪ ついに ここに♪
ありがたいやき♪ おめでたいやき♪ ここえみたいやき♪

For All Life♪

All Life Forever♪ All Life Forever♪
ピピピーピピー♪

All Life For♪

All Life Forever♪ All Life Forever♪
ピピピーピピー♪

アイアイ アイアイアイ♪ ワクワク ワクワクワク♪
イキイキ イキイキイキ♪ ニコニコ ニコニコニココエ♪
ルンルン ルンルンルネ♪ サンサン サンサンサンクス♪

For All Life♪ All Life Forever♪

...

ミライのいつか

健やかな全人類レベルのライフが誕生してから、ずいぶん長い時間が経過している。

協力関係、シナジー関係、『Love - Love の関係』…が増え続け、健やかな天体生態系社会レベルのライフの一員となり、本物の平和が訪れてから久しくなっている。

健やかさ——楽しみ、ユーモア、恵み、心笑、イキイキ、ニコニコ、ワクワク…を増やし続けながら、健全な持続可能な世の中が実現し続けている。

全人類レベルのライフは、究極の再生可能エネルギーの恩恵を受けながら、ますます健やかに暮らし続けている。

食糧問題、燃料問題を含むエネルギー問題も、スカッと解消され続けている。

各種の気候帯の間の自然の恵みの格差も、全く解消されている。

紛争問題も、すっかり解消され続けている。

水不足、砂漠化、気候変動、環境汚染、生態系破壊…を含む環境問題も、きちっと解決され続けている。

自然治癒力も重視されながら、人口問題を含む医療問題の多くも、しっかりと解消され続けている。

…

どれもこれも、十分に成熟した自然知愛、そして、十分に成熟した自然科学が、みんなに共有されながら、みんなのために、有効活用され続けているおかげで——。

音楽 ♪夏 Summer イン ミライのいつかのある日その1へ続く

ミライのいつかのある日その1

とある学校（～12歳）の夏の授業風景——。

「今日は、エネルギーが消滅することを確かめる実験をします。

みなさんは、高いところから物体が落ちている間に、物体の速さが増すことを知っていますね？」

「はーい♪」

「それでは、この、高いところから落ちている間に速さが増すことによって、物体が獲得するエネルギー、詳しくは運動エネルギーによって、物体が床に落ちたときに何が起こるかについて、具体例を挙げて説明してみてください」

「——高い所から床に落ちたボールは、弾みます」

「そうですね。高い所から床に落ちたボールは、弾みますね。

ほかには、ありますか？」

「高い所から床に落ちた卵は、べちゃつとつぶれてしまいます」

「泥だんごも、べちゃつとつぶれてしまうわ」

「雪玉も、べちゃつとつぶれてしまうよ」

「そうですね。高い所から床に落ちた、卵や泥だんご、雪玉は、べちゃつとつぶれますね。ほかには、ありますか？」

「——高いところから床に落ちた陶器やガラスのお皿は、大きな音を立てて、割れてしまいます」

「その通りですね」

「プラスチックや金属のお皿ならば、弾んで大きな音が出るよ」

「そうですね。ほかはないですか？」

「カスタネットやタンバリンならば、弾んで楽器の音が鳴るわ」

「その通りですね。ほかにも、まだまだ、たくさんあると思います。高いところから床へと物体が落ちると、弾んだり、つぶれたり、割れたり、音が鳴ったり…します。

それでは、高いところから床へと物体が落ちた際に、弾んだり、つぶれたり、割れたり、音が鳴ったり…するためのエネルギー源は何でしょうか？」

「高い所から落ちている間に物体が獲得する運動エネルギーです」
「大正解です」

「先生、自分で、最初に正解を話していたじゃん」

「フフフッ。そうでしたね。

つまり、高い所から床まで落ちている間に物体が獲得した運動エネルギーが、物体が弾んだり、つぶれたり、割れたり、音を出したり…の変化を引き起こすためのエネルギー源になったのです。

それでは、次に、物体をそつと床に下ろすことを考えてみましょう。例えば、ポールをそつと床に下ろしたら、どうなりますか？」

「弾みませんし、音を出しません」

「そうですね。卵をそつと床に下ろしたらどうなりますか？」

「卵は割れませんし、丸い形のままです」

「そのとおりですね。泥だんごや雪玉は、どうですか？」

「泥だんごや雪玉は割れず、そのまま丸い形のままです」

「そうですね。お皿は、どうですか？」

「割れませんし、弾みませんし、音を出しません」

「カスタネットやタンバリンは、どうでしょうか？」

「音を出しません。静かなままです」

「それでは、物体をそつと床に下ろしたときは、なぜ、そうならず、そのままになるのでしょうか？」

さきほどの、物体が弾んだり、つぶれたり、割れたり、音を出したり…するためのエネルギー源、運動エネルギーが、どうなったからでしょうか？」

「そんなの簡単だよ。運動エネルギーが消滅したからだよ」「エネルギーが消滅しうることは、常識中の常識だわ」…

「そうですね。よく知られているように、運動エネルギーが消滅したからです。

今、みなさんは、エネルギーが消滅しうることを、あたりまえの常識として知っています。

しかし、過去に、何百年もの間、“エネルギーは消滅しない。エネルギーは永久不滅である”と、心底思い込み続けていた時代が、人類にはありました。

かつて、あらゆる物理学の教授や教師も含めて、ほとんどの人間が、エネルギーは永久不滅だと思い込んでいたのです」

「先生、どうして、そんなに、おバカさんだったのですか？」

「これこれ、おバカさんなんて決して言ってはなりませんよ。逆に利口すぎたのかもしれないのですから。

当時の人類にとって、エネルギーの永久不滅こそが、最新最高の自然科学の基礎だったのです。例外のないエネルギー保存則は、当時、あらゆる教科書に印刷され、あらゆる教師が教え、あらゆる生徒・学生が学んで身につけていた常識だったのです。当時、あらゆる学者が、この例外のないエネルギー保存則を常識にしながら学問

を育んでいました。当時は、老若男女、ほとんど誰もが、心の底から、例外のないエネルギー保存則が最も普遍的な真理だと思い込んでいたのです。当時、人類最高の頭脳を持っていると崇められていたAINシュタインという物理学者も例外ではありませんでした」
「それなのに、どうして、人類は、エネルギーが消滅しうることに気づくことができたのですか？」

「それは、ココエのおかげです。ココエが、初めて、はっきりとエネルギーが消滅しうることを体系的に示したおかげだったのです」

「知ってる、知ってる。ココエのりんごだろ？」 「有名だわよね」
「そうですね。万有引力の法則がニュートンのりんごならば、エネルギーの消滅はココエのりんごですね。

ココエは、考えごとに没頭しているときに、手に持っていた大好きなりんごを、あやまって落としてしまったのです。

りんごは、床に落ちてしまい大きな音を立てました。

ココエは、そのりんごを拾い上げると、大好きなりんごの傷つきよう、へこみようを見て、嘆きました。

でも、そのあと、ココエは、ピンときたのです。

高い所から落としたりんごは、傷ついたり、へこんだり、音を立てたりする。しかし、そうと下ろしたりんごは、傷つかないし、へこまないし、音が鳴らない。これは、いったいなぜなのか？

ココエは、その疑問を、とことん、つきつめ続けました。そのような思索の結果生まれた成果が、当時の常識を覆していた“エネルギーの消滅”の発見であり、そのことが、彼が育んでいた新しい物理学を支えることになりました」

「おもしろい♪」 「おもしろいね♪」

「おもしろいですね。」

ニュートンは、落下するりんごをヒントにして、万有引力の法則を発見したと言い伝えられています。

ココエは、あやまって落としてしまったりんごをヒントにして、エネルギーの消滅を発見したと言い伝えられています。

さあ、みなさんも、りんごから、新しい何かを発見できるかもしれませんよ。チャレンジしてみてくださいね♪」

「ハーイ♪」

音楽終了 ♪夏 Summer

ミライのいつかのある日その2

とある学校（～15歳）の秋の授業風景——。

音楽イン ♪秋 Autumn

「みんなも知っているように—— かつて、エネルギーは永久不滅であり、生成も消滅もしないと心底信じていた人が大多数だった時代が300年以上も続いたんだ。当時、最も有名で偉大だった物理学者の一人、AINシュタインまでも心底信じきっていたほどだった。

このエネルギーの永久不滅の原理を土台にする例外のないエネルギー保存則は、当時の最新最高の科学の1つ、一般相対性理論を育む支えになったことを含め、ある程度は確かに役立っていた。

しかし、そのせいで、物理学という学問は迷路にはまり、その進歩が停滞し、人類は、究極の再生可能エネルギーの十分な健やかな利用から長らく遠ざかり続けることになった——」

「300年も、例外のないエネルギー保存則を信じていた人々が、ほ

とんどだった時代があるなんて信じられないよ」 「例外のないエネルギー保存則のせいで、究極の再生可能エネルギーの十分な健やかな利用から長らく遠ざかっていたなんて、当時の人々は、なんて愚かだったんだろう」

「こらこら、決して愚かなんて言ってはいけないよ。彼らは、一生懸命、全力で、心底、そう思いこみ続けていたのだから。

——みんなは、どうして、こうなったと思うだろうか？」

「人は流れやすいからよ」 「自分を守るために同調するからさ」

「不安だったからだわ」 「疲れていたからよ」 「何となくさ」

「地球中心が好きだったように、永久不滅が好きだったからよ」 …

「そうだね。どれも原因として考えられる」

「先生は、どう思っておられるのですか？」

「先生は、思うんだ。結局は、多くの人が、心の自由を持っていなかつたからじゃないかって——。

もし、多くの人が心の自由を持っていて、自由に感じて、自由に考える習慣を持っていたら、決して、こうはなり続けなかつただろうって——。

「——」

「今は、りんご、卵、皿、ポール、楽器…をそつと下ろす過程、たつたこれだけの簡単な過程によって、エネルギーの消滅が実証されていることに、誰でも気づくことができる」

「ココエのりんご——。誰でも、どこでも簡単に実証できる、わかりきった常識です」 生徒の一人のつぶやき。

「ところが、かつての人々にとっては、その常識が、逆に、とんで

もない、ばかげた非常識だった。先生が注目してほしいのは、人類が、その今の常識に気づくまでの300年もの間、何十億何百億人の人々が、物をうつと下ろす過程を体験していたことだよ」

「——」

「目の前でエネルギー消滅の実証実験が何億回も何兆回も繰り返されていたのに、そのことに誰も気づけなかったのは、なぜだったのだろうか？　ここで改めて考えてみてほしいんだ。

いや、もしかしたら、誰かは、とっくに気づいていたのかもしれない。でも、とっくに気づいていた誰かも、なぜ、そのことについて深く考えようとしたかったのだろうか？　あるいは、その考えを公表しようとしなかったのは、なぜだったのか？　そんなふうにも考えてみてほしいんだ」

「——先生は、心の自由を持っていなかったからだとお考えですね？」

「そうだね。先生は、誰もが身につけていた当時の古い常識が、結局、心の自由を奪い続けていたからじゃないかと思っている。

より具体的には、例外のないエネルギー保存則という古い常識にしばられていた者が、新しい常識の芽に“非常識なナンセンス”とレッテルを貼って排除していた時代であったがゆえに、不安が植えつけられ、人々の自由な感情のあり方、自由な思考のあり方が奪われ続けたからだと思っている。

それは、まるで、裸の王様を目の前にしているのに、みんなで口をそろえて、“見事な服を着ている”と言い張り続けていたような時代であり続けていたからとも言えるだろう。

そのような時代が、300年以上もの間、続いていたんだ——」

「信じられないわ」 「信じられないよ、先生」

「信じられなくても、事実だよ。エネルギーの永久不滅を300年以上もの間、人類は、みんなして肯定し続けていたんだ。

その間、誰も、裸の王様が裸だとは言えなかつたんだ。

当時の、最も優秀で、最も疑り深かつた物理学者の一人AINシュタインでさえも、死ぬまで裸だと言えなかつたくらいに——」

「先生、地球の周りを太陽が回っていたと信じられていた時代に起きていたことと似ていますね？」

「そうだね。似ているね。天動説が信じられていたのは、2000年もの間だつたけれど——」

「2000年！」

「この場合、人類は、2000年もの間、裸の王様が裸である事実を認められなかつたことになる——」

「——」

「あらゆる常識は、誰も疑問を投げかけないからこそ常識であり続ける。だから、あらゆる常識は、周りに流されて思考停止したまま何となく鵜呑みにし続けているおかげで保たれている幻想にすぎない可能性を秘めているんだ。“裸の王様は美しい服を着ている”と同等な幻想にすぎない可能性を——。

一方で、思考停止したまま常識を守り続けることは、同時に自身の不安を減らすことにもつながっている。思考停止したまま“裸の王様は、裸だ！”と指摘せずに“裸の王様は美しい服を着ている”と思い込み続けることが自身の不安を減らしていただろうように。

だから、何かの常識を守り続ける者は、自身の不安を減らし続けたいからこそ、たとえ幻想であっても、この常識に疑問を抱く者を反射的に排除してしまう。

ただ、そのせいで――

ブルーノは、火あぶりにあってしまった。

ガリレオは、死ぬまで自由を奪われ続けた」

「かわいそう」

「ココエも、そういった受難のリスクの存在を承知していた。

それでも、あえて、ココエのりんごを含むココエの成果を公表してくれたおかげで、人類は、例外のないエネルギー保存則という古い常識、幻想的な常識を覆すことができた。

最初の頃、気づいた人は、ごく少数だけだった。

それでも、少しづつ少しづつ増え続けたんだ。

研究ポストについていない無給のボランティア科学者も、研究ポストについている有給の科学者も、ともに気づき始めた。

中には、“エネルギーの永久不滅性の考えや例外のないエネルギー保存則の考えに基づいて、エネルギー消滅やエネルギー生成を完全否定すること”のナンセンスさに気づいた人もいた。

中には、リスクをかえりみず、支持を表明する者も現れた。

それもこれも、多くの人が古い常識をよく確かめるべく、自由に感じながら、自由に考えながら、それぞれのやり方で再発見し、

“ココエ体験”を満喫したおかげだった。

直視した自然についての現実を勇気を振りしぶって公表してくれた方々がいたおかげで、古い常識についての気づきが広まり続けた。

数人が気づき、数十人が気づき、数百人が気づき、数千人が気づき、数万人が気づき…そんなふうにして古い常識への気づきが指数関数的に広まり続け、いつしか、エネルギーの非永久不滅性、エネルギー保存則の例外は、人類にとっての新しい常識となつた。

2000年以上かけて「地球中心、天動説」の呪縛が解かれたように―― 300年以上かけて、ついに「永久不滅のエネルギー、例外のないエネルギー保存則」の呪縛も解かれたんだ。

その結果、全人類は、ついに、究極の再生可能エネルギーの十分な活用に、健やかに取り組める足がかりを得た。

おかげで、全人類は、さらなる飛躍を遂げることができた。

地球環境や地球生態系、全人類の営みを支えるためのエネルギー源として、環境に優しい究極の再生可能エネルギーを上手に活用しながら、全人類は、ますます住み良くなつた地球上で、ますます快適さを増し続けた。

エネルギー不足問題もなくなつた。

食糧不足問題もなくなつた。水不足問題もなくなつた。

多様な気候帯の間の自然の恵みの格差もなくなつた。

気候変動を自在にコントロールできるようになつた。

過剰な温暖化や寒冷化の予防も可能になつた。

天体の地球落下の予防も、より簡単に可能になつた。

これらのことは、健やかに地球上で暮らしていくことだけでなく、健やかに別の天体へ進出することも助けた。

誰もが心豊かになつた。自由時間が増えた。余暇が増えた。

誰もが自分の才能をイキイキと開花させる、健やかな自己実現社

会が到來した。

樂しみが増えた。喜びが増えた。安らぎが増えた。

健康が増えた。笑顔が増えた。心笑が増えた。

ニコニコが増えた。イキイキが増えた。ワクワクが増えた。ウキウキが増えた。ホワホワが増えた。ピンピンが増えた。ユウユウが増えた。

...

つまり、現在があるのは、あれもこれも、みんな一人一人が、心の自由を取り戻し、自由に感じ、自由に考え始め、ただ何となく鶴の呑みにして受け入れていた古い常識の真偽をよく確かめ続けたおかげだったんだ。ココエのりんごも、いいきっかけの1つになりながら――。

それは、同時に、みんな一人一人の心の再生、復興、全快…のおかげ、一人一人の、クヨクヨ、ピクピク、オドオド、ウツウツ、モンモン、ヘトヘト、ムカムカ、イライラ、ピリピリ…から、ニコニコ、イキイキ、ワクワク、ウキウキ、スイスイ、ヒヨウヒヨウ、ホワホワ、アイアイ、ルンルン、ピンピン、ユウユウ…への主体的な方向転換のおかげでもあった。

この主体的な方向転換が、私たちの中にもともと備わっている、自然治癒力の根幹であり、再生可能心エネルギーの根源なんだ。

再生可能心エネルギーという言葉を最初に使い始めたのは、まさに、究極の再生可能エネルギーという言葉を最初に使い始めたココエ自身だった。

ココエは、この再生可能心エネルギーのおかげで、心の自由を得

ることができ、数々の絶望を乗り越えながら、すばらしい成果を誕生させることができた。

つまり、人類を飛躍させる究極の再生可能エネルギーの十分な健やかな利用をもたらした大元は—— 心の自由を生んだ再生可能心エネルギーでもあったんだ」

「おもしろい♪」

「そうだね。おもしろいね。

だから、みんなは、頭だけでもなく、体だけでもなく、ぜひ、心も大事にし続けてほしい。ココエのように——」

「ハイ♪」

音楽フェード・アウト ♪秋 Autumn

ミライのいつかのある日その3

とある学校（～18歳）の冬の授業風景——。

音楽イン ♪冬 Winter

「かつて、人類は病を患い、長い暗黒時代を過ごし続けました。^{わざら}

パイ取り合戦、フルーツ争奪合戦、不満足、不知足、相互破壊、相互絶滅…これらの病、Against Life 病に、人類が翻弄され続けた時代を何と呼びますか？」

「“人類の進化の傷あと時代”と呼びます」

「そうですね。この時代に、人類は、さんざん、不幸を経験し、不幸をまき散らし合い、不幸を互いに強要し合い続けました。

そう。人類は、何百年何千年もの長い間、まさに病を患っていたのです。

音楽フェード・アウト ♪冬 Winter

しかし、人類は、病を治し、どうにか健やかに再生できました」

「誰のおかげでしたか？」

「当時の、みんな一人一人のおかげです」

「当時の、みんな一人一人の何のおかげでしたか？」

「当時の、みんな一人一人の気づきのおかげです」

「当時の、みんな一人一人の、何の気づきのおかげでしたか？」

「常識ですよ。Against Life 病が蔓延していること、健全を取り戻すためには、最終的に、For All Life 路線こそをとり続けることが大事であることの気づきのおかげです」

「その通りですね。ココエが活躍していたころから、あらゆる分野、あらゆる場面において、Against Life 病が蔓延していることに、気づいたおかげです。

それは、人間社会におけるあらゆる苦難、害悪、罪悪の本質が、“他者が犠牲になるのはよく、自分らさえよければいい”的な発想に基づく Against Life 病であることに気づいたおかげであり、同時に、人間社会におけるあらゆる幸福、善益、功徳の本質が、“自分らだけでなく、みんなも喜ぶことこそがよい”的な発想に基づく For All Life 路線であることに気づいたおかげでもあります。

それは、この地球上であらゆる人間社会どうしが争い合い続けることが、個体の中であらゆる細胞社会どうしが争い合い続けるほどに、愚かで不健康であることに気づいたおかげでもあります。

つまり、一人一人が、Against All Life 病が、あらゆる不健全さ——邪悪さ、醜さ、不毛さ、不調和、不快さ、不信、憎しみ…の根

源であることに心の底から気づき、その上で、一人一人が、あらゆる健やかさ——善良さ、美しさ、豊かな実り、調和、心地よさ、信頼、感謝…の根源である For All Life 路線をとるように心の底から転換することが、みんなに広まり続けたからこそ、人類全体も気づき、再生できたのです。

この時代のことは、ふつう、何時代と呼ばれていますか？」

「ルネサンス時代と呼ばれています」

「そうですね」

「先生、ルネサンス時代ではなく、ルネサンス時代と呼ばれているのは、なぜですか？」

「わかりません。

いずれにせよ、このルネサンス時代に、一人一人の気づきのおかげで、それまで人類の中で、ひどく流行っていた ^{はや}Against Life 病が少しづつ克服され、For All Life 路線の健康な状態への再生が少しづつ広まり続け、ついに全人類が健康を取り戻すに至ったのです」

「どうして、ルネサンス時代に、それが起こったのですか？」

「さまざまな要因が考えられています。

その中で、特に、ココエのりんごの実証実験を通じた気づき、および、その気づきをきっかけとした、心の底からの再生——ビクビク、クヨクヨ、モンモン、ヘトヘト、ピリピリ…から、ニコニコ、イキイキ、ワクワク、ウキウキ、ホワホワ…への心の再生——が広まり続けたことが大きかったと言われています。

さらには、ココエの示した再生可能心エネルギーの考えも、大きな影響をおよぼしたとも言われています。

ですので、ルネサンクス時代は、“心再生”時代、あるいは、ときに“心笑再生”時代とも呼ばれています。

——ココエは、次のような言葉を残しました。

“電荷エネルギーや磁極エネルギーがくめども尽きない究極の再生可能エネルギーであるとするならば、心のエネルギーは、くめどもくめども尽きない超究極の再生可能エネルギーである——”

彼は、何度も何度も絶望を乗り越え続けながら、健やかな自己フルーツ化——“自己実現 For All Life”を果たしました。

彼は、すてきな“フルーツ For All Life”を生み出しました。

私たちも彼を多いに見習いましょう」

「ハイ♪」

「そこで、最後の課題です。

みなさん、どのような健やかな自己フルーツ化——どのような“自己実現 For All Life”を果たしたいでしょうか？

君らは、どんな“フルーツ For All Life”を生み出したいですか？それを、少しずつ、レポートにまとめてみてください。

提出義務は、ありません。

提出期限も、ありません。

高校を卒業してから、提出してもかまいません。

大学を卒業してから、提出してもかまいません。

就職してから、提出してもかまいません。

結婚してから、提出してもかまいません。

社会人を引退してから、提出してもかまいません。

...

ゆっくり、自分自身を見つめながらまとめてみてくださいね。

もし提出したくなったら、いつでも提出しにいらっしゃい。

教師たちは、代々、受付を引き継いでおきますから——。

今日は、この学校生活、最後の歴史の授業ですね。

少し、早いですが、みなさん、ご卒業、おめでとう。

みなさんの活躍を楽しみにしています」

音楽終了♪春 Spring

はるかにミライのいつか——

地球上で誕生した健やかな全人類レベルのライフは、天体生態系社会レベルのライフ——宇宙生態系レベルのライフの一員として健やかに宇宙デビューを果たしながら、立派に活躍し続けている——。

どこかの天体での核爆発の発生シグナルがキャッチされた。

「はあー、始まってしまったわ」

「また核爆弾を使い始めてしまったよ」

「ある意味、いずれ、遅かれ早かれ、この道をたどることが少なくないのだけれど——」

「ただ、それでも、今回は、まだ望みがありそうよ」

「なんといつても被爆種が、全く復讐しようとしていないからね」

「復讐するどころか、核兵器の廃絶を率先して推進しているからね」

「そうね。でも、これが、レアで貴重な一步だって聞いたわ。

それにしても、どうして、多くの異星人類の一部の種は、病み続けて復讐に燃え続けてしまうのかしら」

「1つは、被害者の無念に心を痛めて悲しみが止まらず、心が安らかにならないままだからだろうね。ある意味優しすぎるのさ。でも、全く気の毒なことさ。1つの天体の中で病み続けて、アンチ非自種の方針をとり続けてしまうことは、1つの人体の中で病み続けて、アンチ非自細胞、アンチ非組織、アンチ非自器官の方針をとり続けてしまうほど愚かで、新たな悲惨な結果を招いてしまうのだから」

「そうね。悲しくてつらいけれど、この愚かさや新たな悲惨さに自ら気づいて自身で病を克服できるような賢い人類でなければ、宇宙デビューする資格はない。アンチ非自種を正当化し続けるような愚

かな未熟人類は、厳しいけれど、地球からも退場してもらわないと
いけない。次の新しい人類にチャンスを与えるためにも——。

もちろん、最初から宇宙デビューの資格があるなんてことは稀で、
“罪を憎んで種を憎まず”の言葉が示唆しているように、過ちに気づいて軌道修正する可能性がある限り、本来どの未熟人類にも資格を得る望みがある」

音楽イン ♪ Birthtime

「ひとまずは、チャンスを与えられた、この新しい異星人類に、病から再生して無事に育ち続けることを期待するしかないですね」

「そうですね。どうか病が治って無事に育ち続けますように——」

「今回の新異星人類は、病から再生できて、無事に育ち続けて、健やかな誕生に至り、愛されながら繁栄し、宇宙の宝となれるだろうか？ それとも、病から再生できないで、流産して、あるいは、中絶させられて、健やかな誕生を果たせず、疎まれながら滅亡し、宇宙の^{くず}肩となるだろうか？」

「早く気づいてほしいね。この重大な分岐点の存在に——。」

病から再生できれば、存続。誕生。愛され、繁栄。宝。

病から再生できなければ、流産。中絶。疎まれ、滅亡。^{くず}肩。

そんな、あたりまえのこと——」

「本当に、早く気づいてほしいよ。

病から再生できなければ、他滅だけでなく自滅が待っているということ。そんなに、悲劇的でもつたないことに——」

「本当に、早く気づいてほしいね。病から再生できれば、みんなが存続できて、健やかに誕生＆宇宙デビューできて、いいことずくめが待っていること。そんなに、おいしくてありがたいことに——」

「この分岐点の存在を、今すぐ教えてあげたいけれど、自然治癒を待つしかない——」

「お願い。早く気づいて。早く」

「気づいて、病から再生できれば、この新異星人類も、健やかな恒久的平和、健やかな宇宙デビューにたどり着ける」

「たどり着いてほしいね。

新しい人類も、いつかここへ——」

「全く、そうだね。——気づいてくれ！ 気づいてくれ！ 再生してくれ！ 再生してくれ！ どうにか、無事に育ち続けてくれ！」

「無事に育って！ 無事に育って！」

「そうして、無事に、宇宙へ誕生してきて！ そうして、この宇宙の新たな宝になって！ そうして、お祝いされて、愛され続けて！」

「ルネサンクス、ルネサンクス、ルネサンココエ、ピピピーピピー♪」

「なんですか？ それは」

「はるかなカコから伝わるという、おまじないでござる」

「不思議な響き——。——ルネサンクス、ルネサンクス、ルネサンココエ、ピピピーピピー♪」

...

音楽エンドロールに続く♪ Birthtime

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For All Life

もう1つのエピローグ

～分岐点～

【完】

さんぽフルーツ【物語 3.31】『7つのワクワク枠』《10》
もう1つのエピローグ～分岐点～ 2023年7月 - 2025年1月